

ヨーロッパの宿屋の起源：客人厚遇からホスピタリティへ

—H・C・パイヤー『異人歓待の歴史』を読む—

種 田 明

Von der Gastfreundschaft zur Hospitalität

—mitlesen H. C. Peyer 'Von der Gastfreundschaft zum Gasthaus. Studien zur Gastlichkeit im Mittelalter'—

Akira OITA

要 旨：H・C・パイヤーの『異人歓待の歴史』は、中世ヨーロッパにおいて「異邦人を迎え入れ、食事を出し、宿泊させ、そして庇護すること」（客人厚遇）がどのように行なわれていたかを詳述している研究書である。各時代各地にさまざまな異人・客人の“もてなし”方があり、それらの客人厚遇の中から、13/14世紀転換期頃に「支払いを受ける宿屋（営業宿屋）」が、さまざまな形態の異人歓待（ホスピタリティ）の主軸になって行ったことを同書は緻密に実証している。

異人歓待／客人厚遇は“ホスピタリティ”の一言では言い表せない。古来、異人・客人は神でもあり、敵でもあった。中世から近世に神・敵を厚遇することから、人と人が“交換（財、情報、人的サービス）すること・その行為、またその場所（私宅や建物、居酒屋や宿屋など）と関係者をふくむ接遇全体”に変遷し、今日いう旅行者・観光客を迎える宿屋・旅館・ホテルなどの“ホスピタリティ”に至ったのである。

キーワード：異人歓待、客人厚遇、ホスピタリティ、営業宿屋、交換

本書と著者について

H・C・パイヤー（Hans Conrad Peyer）の『異人歓待の歴史（Von der Gastfreundschaft zum Gasthaus : Studien zur Gastlichkeit im Mittelalter, Hahnsche Buchh. 1987）』は、スイスで刊行されたドイツ語の研究書である。『異人歓待の歴史』（以下、本書という）の翻訳は岩井隆夫、ハーベスト社から1997年にされ、邦訳副題には「中世ヨーロッパにおける客人厚遇、居酒屋そして宿屋」⁽¹⁾と付されている。

著者パイヤーはスイス人で、1922年にチューリッヒに生まれ、1994年チューリッヒで亡くなった。彼は1941年から歴史学・経済史・ドイツ学（Germanistik）をチューリッヒとジュネーブで学び、1947年に博士学位（Promotion）、1955年に教授資格（Habilitation）を得ている。この間、数次にわたりイタリアに研究滞在している。本書の参考文献（通し番号で〔1〕から〔679〕に上る）からは、ラテン・伊・英・仏・西語（古語から中世・近世語ふくむ）に通曉していたことが窺える。1956年からチューリッヒ国立文書館研究助手、1963年に名義教授（Titularprof. 呼称（名義）のみの教授）、1964年国立文書館員、1966年員外教授（außerordentlicher Prof. : 現在で言う准教授）そして1969年からチューリッヒ大学正教授（「スイス史・一般社会経済史（1750年まで）」講座）であった。1982～1984年には哲学部（第1学科が歴史学である）学部長を勤めた。

パイヤーはスイス社会経済史に明確な形を与えた。彼は銀行制度、商取引の起源、ならびに市場の制度化（史）を研究した。また彼の Gasthäuser（宿屋、本書では客人館とも訳されている）の研究により、心性史（Mentalitätsgeschichte）への扉が開いたのである⁽²⁾。

岩井によると、歴史叙述を史実の再構成という側面から分類すると、大きく普遍史と個別史に分けられる。前者は、ある概念規定やテーマにもとづいて、時間や空間を横断して総合的に再構成するものであり、後者は、時間と空間を

限定した対象にかんして、一定の視角から再構成するものである。パイヤー教授の業績をみていると個別史という側面が出ている著書や論文がほとんどすべてで、本書は普遍史に属する唯一の研究ということになる、と。(p.402) 本書で扱われている内容はきわめて多岐にわたるため、個別地域の制度史と対応させてそれぞれの異人歓待の歴史の変遷をとらえることはじゅうぶんになされていない。(p.403) だが、今に至るまで研究の礎に据えるべきものとされているのである。

ことばと用語について (本書・第一章序論 pp.1~19から抄録)

ことばとしての「客人厚遇」から、今日用いられている「ホスピタリティ」までには、長い道程／歴史の変遷があった。その間の、いくつかの鍵言葉をキリスト教信仰・商業・交換(財、情報、人的サービス)を軸に序論からみておきたい。

「客人厚遇 (Gastlichkeit)」－異邦人 (Fremde) を迎え入れ、食事を出し、宿泊させ、そして庇護すること：客人厚遇から後に、「キリスト教の愛にもとづく異人歓待」、「君主歓待 (Herrschaftliche Gastung) とよばれる君主や権力者の宿営 (Einquartierung)」、「貨幣経済上の異人歓待業 (Gewerbliche Gastlichkeit)」へ展開してゆく。初期の異人歓待を英語では [primitive hospitality] と言いあらわす。

「庇護 (アジール Asyl) としての客人厚遇」－襲撃や殺害や飢えや喉の乾きから異邦人を庇護すること：異邦人庇護 (Fremdenschutz); アジールとは力づくで連れ去られることから庇護すること。(アジールには「至高聖所」という訳語もある：種田)

「客友関係 (Gastverhältnis)」－ホメーロス時代から客人厚遇は受け継がれるものとされ、識別するための標識として割符 (Symbolon) や客友の認識標 (Tessera hospitalis) が用いられた。

「公の客人厚遇 (hospitium publicum)」－ローマ時代 (紀元前4世紀以降) 整備拡充された国家による異邦人庇護をいう。

「クセノーン (Xenon)」－ローマ帝国のギリシア諸都市にあった客人館のこと。

「クセノドキーエン (Xenodochien)」－紀元前、砂漠のオアシスの噴水のある中庭の周りに建てられた休息所 (Rasthaus)・休息地を原型・手本として、ローマ帝国の街道沿いの宿駅 (mansio; Raststelle) や馬の継立所 (mutatio; Pferdewechselstelle) がつくられた。同じく休息所を手本として、ユダヤ教のシナゴグ宿があらわれ、これらにつづいたのがクセノドキーエンであった。クセノドキーエンは旅するキリスト教徒を無償で泊めて食事を出したりするための家のこと。4世紀以降シリア・エジプトへ、5・6世紀には東ローマ帝国、6・7世紀にはイタリア・ガリアへ広まる。こうした家はかなり急速に、旅人や巡礼者のための宿と病者や貧者や老人のための療養施設を兼ねそなえたものに発展していった。

「古代ローマの宿屋」－人間と家畜のための寝場所と食糧を提供する宿屋：使われた名称＝「ホスピティウム (hospitium: どちらかといえば良質の宿屋)」／「デーヴェルソーリウム (deversorium)」／「マンシオー (mansio)」／「スタブルム (stabulum: うまやをそなえた宿屋)」／「タベルナ (Taberna)」、「カウポーナ (caupona: ふつうの、および下劣な旅籠 (Wirtshaus))」＝宿屋あるいは食べ物屋、などと呼ばれた。「タベルナ」は宿屋から酒屋 (Schenke) まで幅広いさまざまな意味を持ち、この言葉だけがロマンス諸語に入っていた。

「営業宿屋 (メリトールリウム meritorium)」－旅人が支払いの見返りに一時的に滞在した飲食店 (Lokal)。古代末期から中世への移行期に、カウポー (旅籠亭主 Wirt、ぶどう酒の小売商 Detailverkäufer、小商人 Kleinhändler) から古高ドイツ語の借用語コウフォン koufon (買う) が生まれた。おそらくこの言葉の由来はカウポーネスにある。(＝コウフォンから現代ドイツ語 kaufen カウフェンとなった：種田)

《英語との関連：SODより》

「ホスピティウム」 Hospitium, 1650. [L; see Hospice.] 1. = Hospice 2. A hall or hotel for students in a university 1895 (大学生のための^{ホール}館またはホテル (宿泊所) のこと)。

「ホスピス」 Hospice, 1818. [- (O) Fr. *Hospice*- L. *hospitium* hospitality, lodging, f. *hospes*, *hospit*- Host] 1. A house of rest and entertainment for pilgrims, travellers, or strangers, esp. that belonging to the monks of St. Ber-

nard on the Alps; also a home for the destitute. 2. A hostel for students 1895 (1. 巡礼者、旅人、異邦人、とくにアルプス山中の聖バーナード修道士のための休息と歓待の家 2. 大学寄宿寮)。

「ホスピタリティ」Hospitality. ME [- (O) Fr. *Hospitalité* - L. *hospitalitas*, -tat, f. *hospitalis*] 1. The act or practice of being hospitable; the reception and entertainment of guests or strangers with liberality and goodwill.

(1. 歓待 (もてなす) する行為またはその実行; 寛大さと善意による客人あるいは異邦人の歓迎・歓待 [2. †1711、と 3. †1761は死語 (18世紀の用例のみ) なので略す]。

Fig. 1 中世の宿屋 (夜) の外観



(出所:「宿と酒場 (Dragon 誌#29号より)」⁽³⁾)

「宿屋 Inn」が出現する前の「営業宿屋メリトリウム / Tavern(a)」は図 (Fig. 1) のようであった。Dragon 誌は RPG (ロール・プレイング・ゲーム) の専門誌であるが、解説は本書と符合するので以下に抄録引用する:

… / 「宿屋」と「酒場」という二つの単語は現代の用法ではほとんど同義になっていますが、これはいつでもそうである訳ではありません。宿屋とは定義の上では旅人が食事と休憩場所を金銭を支払う事で入手できる場所のことです。酒場とはエール (と、その他の飲み物) が食事と共にサービスされる場所とも言えます。現代社会における酒場の一例は、英語のパブまたはパブリックハウスでしょう。ある場合には宿屋はその敷地内か歩いていける場所に酒場を含んでいるでしょう。

小さなコミュニティ (人口 1~150) にはおそらく宿屋の必要が無いでしょう。これらの小さなコミュニティには交流場所と旅人が食事と飲み物を得る為の場所を提供する為の酒場があるかもしれません (75%の確率)。宿泊について、旅人は小さなコミュニティで地元の住民に休憩場所を請うか、外で眠るかを強いられてる事に気付くでしょう。遙か昔には、宿屋が無かったため、旅人や巡礼者は休憩場所を地元の農民や町の人々の家に求めなければならなかったでしょう。旅人は地方のコミュニティの外に関するすばらしい情報源でしたので、休憩場所を求める要請はほとんどうまくいきました。

コミュニティがより大きく (人口 150~500) になると、金銭のために旅人に食事と休憩場所を提供するという概念はもっと一般的なものになります。通商路に位置するこのサイズのコミュニティでは 1~10の宿屋を維持するでしょう。通行量の多い通商路に近ければ近いほど、宿屋の数は大きくなります。

大きな町と交易の中心地は多くの宿屋と酒場を維持する事ができました。私達は一般的に、中世のコミュニティが大量の人口を持っていたとは考えませんが、1453年の参考文献によれば、パリは 3 平方マイルの広さであったと言います。これらの 3 平方マイルの中には 150,000 の人々がいて、5,000 軒の宿屋と酒場がありました⁽³⁾。

宿屋の規模は一般的に 5~50 室の客室数の範囲 (コミュニティの位置と必要性に依存) でした。前述の通り、宿屋は酒場の形式の区画を宿屋の敷地内か、すぐ近くに持つてるかもしれません。… (以下略)

異人歓待に発展段階説は合致しない（本書・第一章序論 p.19～23の要約）

異人歓待の発展段階と、社会の発展段階とを関連させようとする試みは繰り返行われてきたという。シューベルト（E.Schubert）は、以下の三段階で関連させている：

第一段階 敵としての客人と未開社会

第二段階 友人としての客人と古代社会

第三段階 客体としての客人と貨幣経済や信用経済がゆきわたった近代社会

…ボルケージー（L.J.Bolchazy）は、ギリシアやローマの初期を六段階も想定している：

第一 異邦人を忌避するか虐待するかして、対外関係としての個人同士の接触がなく、沈黙交易（Stummerhandel 交易をおこなう双方が、互いの姿も見せずまた言葉も交わす交渉もせずにおこなう交易）しかみられない段階

第二 商人や使者といった選ばれた異邦人の魔力をうしなわせた上で、ひとつの社会集団に受入れる段階

第三 異邦人が神として崇拜される段階

第四 異邦人の客人が神の御心にかなった良き待遇を受ける段階

第五 利益の追求を動機として、客人権が契約によって規制される段階

第六 庇護を求めてきた者にたいする、他人の幸福追求にもとづく異人歓待の段階

これらすべてが重要な形であることはまちがいないにしても、それらが正確にこの順序にしたがっていたかどうかはたしかなことではない。

初期には異人歓待のいくつかの形が相ついであらわれたり、並存したり、融合したりしていたという問題を満足のゆく形であきらかにすることはできない。「異邦人にたいする敵対から単純な客人厚遇の形を経て、多種多様な客人厚遇の形にいたるようになっていき、ついには貨幣経済にもとづく異人歓待業にいたった」というように、異邦人のもたらす影響によって複雑になっていく順序という仮定で甘んじざるを得ないであろう。

あきらかにされていないこと（史実）や知らなすぎること（とくに14世紀以前にどの身分の旅人であれ、いったいどこでどのように食事をして泊まろうとしたのか）が多い中、広くゆきわたった段階理論では：

「異教徒の客人厚遇」「教会の慈善による異人歓待」（中世後期以降）「居酒屋や宿屋による異人歓待業（が優勢であった）」／「未開社会の異人歓待」「多種多様な異人歓待」「（最終的には）貨幣経済上の異人歓待」という古代の発展がふたたびくり返された／「いくつかの異人歓待の形の併存がみられた」、の三類型が想定されている。

異人歓待についてのじゅうぶんな文献情報を、系統だった文献検索によって手に入れることはほとんどできない。個々の地方や地域についての個別研究は、視野を広げて地理上の「いろいろな地域との」比較とむすびつかなければならず、際限のなさや信頼性の欠如という危険にもおちいらざるを得ない、研究史上のアポリアなのである。

Fig. 2 中世の宿屋（昼）



（出所：「著作権フリー背景素材集14中世」⁽⁴⁾）

わかっていること（史実）をつなげて、本書では「営業宿屋（例えば Fig. 2）の登場」を次のようにいう：

十一・十二世紀の変わり目までは、個人同士のむすびつきや現物経済の形をとった異人歓待が広くみられていたのであるが、それ以降は解体したり変化したりした。また貨幣経済上の異人歓待や異人歓待業はすでに古くからあったのではあるが、それまでは付随的な役割しか果たしてこなかった。それ以降になるとあらたに国家による異邦人の庇護が広まったり、貨幣経済上の異人歓待や異人歓待業が広まったりして、これらのあいだで競合がなされるようになった。こうしたことは十三・十四世紀の変わり目頃にヨーロッパのかなりのところで営業宿屋が発達するにつれて、終止符を打った。宿屋は旧来の形をすべて急速に圧倒してしまった。旧来の形はすべて宿屋にゆきついたり、もはや宿屋に付随するものとして存続するにすぎなくなってしまった。（本書 p.396）

『異人歓待の歴史』の構成について

本書は、第一章序論において「異人歓待の歴史」研究の骨格と課題を示している。第二章（pp.29～308）では中世初期・盛期の異人歓待の現象形態・変遷・むすびつきを事例・対比で詳論し、中世後期の宿屋を論じる第三章（pp.309～388）へつなげている。第四章結論は短いもの（pp.389～399）で、第二・三章を凝縮し要点を‘小見出し’にして示している。

『異人歓待の歴史』の目次

第一章 序論 ——異人歓待の初期の形——

- 第一節 客人厚遇
- 第二節 その後の客人厚遇の発展
- 第三節 君主や権力者の歓待
- 第四節 異人歓待業
- 第五節 異人歓待の発展についての理論
- 第六節 中世への展望

第二章 中世初期・盛期の異人歓待

- 第一節 客人厚遇
- 第二節 食糧抜きが無償の異人歓待
- 第三節 支払いを受ける異人歓待の登場
 - 第一項 物語史料のなかの巡礼者、個人、騎士
 - 第二項 十二世紀から十四世紀までの宿主と客人の権利
 - 第三項 イタリア
 - 第四項 フランスとスペイン
 - 第五項 ドイツ語圏
 - 第六項 死亡した客人の遺産
 - 第七項 非ヨーロッパ圏の商人の歓待
 - 第八項 成果

第四節 居酒屋

- 第一項 古代末期から十一、十二世紀まで
- 第二項 十一、十二世紀から十四世紀まで
- 第三項 東ヨーロッパの居酒屋
- 第四項 居酒屋禁制
- 第五項 領主による居酒屋禁制から共同体や領邦君主による居酒屋禁制へ
- 第六項 居酒屋禁制圏
- 第七項 都市内の居酒屋高権の破壊にたいする闘争

- 第八項 成果
 - 第五節 教会の異人歓待——クセノドキーエン、修道院、宿坊および施療院——
 - 第六節 商人のための世俗の共同宿泊と強制宿泊
 - 第七節 君主の暴力歓待、とくに国王の暴力歓待
 - 第一項 一般的発展
 - 第二項 事前通告と従者と持続期間そして食糧
 - 第三項 宿泊
 - 第八節 あらゆる種類の領主権所有者の歓待
 - 第一項 貴族領主の歓待
 - 第二項 歓待とレーエン制
 - 第三項 教会の歓待
 - 第四項 都市での歓待
 - 第五項 狩猟歓待
 - 第九節 貴族の客人厚遇や領主歓待から宿屋へ
- 第三章 中世後期の宿屋
 - 第一節 公の施設としての居酒屋と宿屋
 - 第二節 市場に近似した取引場所としての居酒屋と宿屋
 - 第三節 旅籠の屋号と看板
 - 第四節 旅籠の宿泊提供・食糧提供・秩序維持機能
 - 第五節 公の滞り場所（監獄・人質留置の場・アジール）としての宿屋
 - 第六節 陰謀や騒乱の起点としての宿屋
 - 第七節 宿屋の外観と設備
 - 第八節 宿屋の収容能力・軒数・分布
 - 第九節 宿屋と宿屋亭主の社会的地位
 - 第十節 宿屋亭主のツンフト組織と競合からの保護
- 第四章 結論
 - 第一節 方法上の考察
 - 第二節 異人歓待の形とその変遷
 - 第三節 宿屋への移行

(訳者あとがき／史料・文献目録／事項索引／地名索引／人名索引)

異人歓待から営業宿屋の登場へ

本書は、「…史実を、時間や空間を横断して総合的に再構成したものである。そして、最終的には、十三・十四世紀の変わり目以降の段階で、「支払いを受ける」異人歓待の場としての宿屋がそのほかの異人歓待の場を圧倒していくことになる歴史的経緯を描いている」研究書である。

「訳者あとがき」に岩井は、本書の史実を整理して「表一 異人歓待の分類」(本書 p.403)「表二 異人歓待の歴史の変遷」(本書 p.404)を作成掲示している。この2表は、今後の研究に大きな支柱になろう。

“観光学”辞典には‘異人歓待’‘宿屋(の起源)’を扱っているものはほとんどない⁽⁵⁾。「ホテル観光用語辞典」⁽⁶⁾の項目「ホテル」は、以下のような用語解説である：

人々に、宿泊、飲食、宴集会、娯楽などのサービスを提供する施設。語源は、ラテン語の[hospitale]で、[hospes]、[hostel]などの語を経て、18世紀末に[hotel]という語が誕生。宿泊施設の歴史として、古代エジプト時代のキャラバン・サライ(隊商宿)、ヨーロッパ中世のホスピス(僧侶巡礼者用宿)、ギリシア時代のホステール(催事参

表一 異人歓待の分類

- A 無償のもの
 - (1) 負担者の厚意によるもの
 - a 客人厚遇 (Gastfreundschaft)
 - b 食糧 (Verpflegung) 抜きは無償の異人歓待
 - c 教会の歓待
 - (2) 受益者が強制するもの
 - a 君主歓待 (Herrscher Gastung)
 - b 領主歓待 (Herrschaftliche Gastung)
- B 有償のもの
 - (1) 支払いを受ける異人歓待
 - a 巡礼者にたいする歓待
 - b 商人宿主 (Kaufmannsgastgeber)
 - (2) 商人の共同・強制宿泊 (Gemeinschafts- und Zwangsunterkunft)
 - (3) 異人歓待業 (gewerbliche Gastlichkeit)
 - a 居酒屋 (Taverne)
 - b 旅籠 (Wirtshaus)、宿屋 (Gasthaus)

表二 異人歓待の歴史の変遷

- 客人厚遇
 - 古代から十一世紀まで
 - 十二世紀以降：衰退 (→君主・騎士層の特異性)
- 巡礼者や商人の異人歓待
 - 十一世紀以降
 - 十三世紀以降：商人歓待と居酒屋と市場のむすびつきの解体⇒営業宿屋
- 居酒屋
 - 十一、十二世紀以降：市場や都市の前段階や付属物
 - 十三世紀以降：市場や都市と競合、移行⇒営業宿屋
- 教会の異人歓待
 - 十一世紀末以降
 - 中世盛期以降：分化 (→富裕者や権力者に限定)
 - 商人や旅人や貧者の場合は移行⇒営業宿屋
- 君主歓待
 - 十一・十二世紀の変わり目まで
 - 十二世紀以降：排除、移行⇒営業宿屋
- 営業宿屋
 - 十三・十四世紀の変わり目以降
 - そのほかの異人歓待の形を圧倒
- 登場の背景
 - (1) 都市当局 (ツunft) の経済政策
 - = 分業化
 - a (家族のための) 個人の家
 - b (異邦人のための) 宿屋
 - c (都市の) 市場や商館
 - (2) 商業技術の変化
 - a 書状の使用の増大→隊商 (商人の随行や個人的接触) の不必要化
 - b 商品の量の増大→個人の家での保管の困難
 - (3) 集落 (都市・農村) のほかの家をさまざまな歓待の負担から免除するため
 - ⇒公の異人歓待の場としての宿屋
 - a 宿泊・食糧提供の場、異邦人と地元の人間の情報交換の場
 - b 抵当場所や商品倉庫
 - c 市場や役所のはたらきを持った場

加者用の大きな家) などがある。中世は、封建領主による封鎖経済のため、庶民の移動が困難な時代で、宿屋は影をひそめる。ルネッサンス期に入り、交易の発展と共に、旅行者の需要に応えるため、インが形態を整える。16世紀以降、絶対王政の成立と共に宮廷文化が栄え、王侯貴族や特権階級の迎賓のため、贅沢な料理、華麗な社交場、豪華な寝室が設けられ、この貴族的なホテル様式がフランスを中心に展開された。これが近代ホテルへの系譜となる。…以下略（下線は種田による：すなわち、この表記は本書とは異なり、かなり一面的・皮相的なものである。）

本書と対照すると、下線で示したところが史実と異なっていることは明白である。16世紀に海路、すなわち「強力に発展した都市網」⁽⁷⁾をもった地中海空間について、F・ブローデルは次のようにいう：

…交通路ができるにはそれに必要な休憩地点がなければならない。つまり船の停泊地、波よけのない錨地、隊商宿や〈ハン〉、西ヨーロッパでは一軒だけぼつとある宿、昔は城塞などである。たいていはこうした休憩地、ねぐら—こういうものがなければにぎやかな交通路はできないのだが—は、都市であり、このにぎやかな休憩地に向かって人々は急ぎ、そこに到着して喜びを味わい、さらにはサラゴサの町に入ったグスマン・デ・アルファラーチェのように感謝の念を覚える者もいる。…⁽⁷⁾

地中海を除く他の地域、「パリとロンドンはやっとその近代性の端緒についたばかりで」あり、ネーデルラント、高地ドイツの諸都市・ハンザ同盟の諸都市などは「すべて、たとえどれほど美しく、活気にあふれているとしても、内海の諸都市と同様に密度の濃い、複合的な集合は形成してない」⁽⁷⁾のである。とはいえ、「休憩地、ねぐら」は宿屋なのである。

本書第二章第三節と第五節との対照に、カンタベリー（イングランド）の例を二つ—「旅、すなわち空間移動」と「観光と文学」の視点から—挙げてみよう：

巡礼は通常は夏の時期に行われたので、巡礼者は、しばしば、生け垣の下や小屋の中で眠ったのであろう。イングランドに残存している専門の宿泊所としては、修道士や献身的慈善によって運営されている施療院（ホスピス）にはじまり、旅行者に対してホスピタリティーを提供するよう戒律が義務づけている修道院、そして、通常の宿屋までいろいろであった。人気のある聖地では巡礼者たちを収容するための大きなホールが必要とされた。ウィンチェスターの聖スウィザン（St. Swithun）の聖地における「見知らぬ人たちのホール」（Stranger's Hall）は、そうしたゲストハウスであり、ベネディクト派修道士たちによって境内で運営されていた。カンタベリーは多くのホスピスを持っていた。たとえば、「殉教者聖トマスのホスピタル」（Hospital of St. Thomas the Martyr）は、今日ではキングズ＝ブリッジ＝ホスピタルとして知られるが、そのチャーター（設立文書）によれば、「輝かしい殉教者トマスによって貧しい旅人たちを受入れるために」建設されたとある。このことは、12世紀に殉教者トマス＝ベケットのもとへの巡礼が生じる以前からカンタベリー巡礼が盛んであったことを示している。他の巡礼者たちは、大きなクライスト＝チャーチ付属修道院（司教座教会）に宿泊した。より少数の巡礼者たちは、北門側のセント＝ジョン＝ホスピタル、聖オーガスティン修道院、あるいは托鉢修道士たちによって運営されているゲストハウスなどに分宿したようである⁽⁸⁾。

本書（第二章第五節 p.175）には原著にはない「サンクト・ガレン修道院の建築平面図」⁽⁹⁾が採りこまれていて、①～④の番号・説明が挿入されている。図の、修道院教会（①）のすぐ脇に「賓客用宿舎」（⑩）、①を挟んだ向かい側に「巡礼者・貧者の宿舎」（③）が描かれている。修道院の異人歓待は「中世初期・盛期の社会事情や経済上の財源に応じてなされたものであって、不平等で限定された異人歓待であった。」

…修道院の異人歓待は巡礼やそのほかの旅を補完して旅をしやすくしたかもしれないけれども、これだけではおそらく旅人は投宿することができなかった。修道院の異人歓待は、一方では権力者による過剰な要求のために、他方では貧者の数がかかり多かったために、また周辺の貧者によって巡礼者や旅人が追いやられたために、つねにおびやかされていた。十三世紀以降のたびかさなる危機の時代にあっては、こうしたきわめて限定された意味においてすらあまりうまく機能しなくなってしまったにちがいない。古い形は機能しなくなり、中世後期には限

定されてふるまわれるようになっていった。(本書 p.182)

人文学的、比較文化論的な視点から観光の歴史にアプローチした山田利一は14世紀末の物語詩『カンタベリー物語』(The Canterbury Tales) の記述から次のように論じている：

最後に『カンタベリー (ママ) 物語』の舞台背景、宿泊施設と道路事情について考えてみたい。作品の中で宿は *hostelry* と表記されているが、この語の初出例として辞典 (OED) にはこの作品が採択された。そしてこの時代、旅の交通手段は、陸上交通に関しては、歩くか馬に乗るしかなかった。ゆえに宿屋は、人間はもちろんのこと、馬の世話をする施設でもあった。『カンタベリー物語』では冒頭に、「部屋も厩も手広いうえに、下へもおかぬもてなしぶり」との文言がある。当時は、そして近世・近代を通じて道路事情が悪く、晴れば土ぼこりが舞い、雨が降れば泥道になり、街道を行く歩行者はいずれの気象条件においても靴や衣服を台無しにされた。ゆえに高貴な人、財力のある人は、男女を問わず騎乗せざるをえなかったのであり、宿泊施設は人と馬の両方を休ませる施設であった⁽¹⁰⁾。

本書と対照してみよう：

…イングランドの「宿屋 Inns」は、十四世紀には広間一部屋から成っている場合がとくに多かったようであり、その時代のイングランドのかなり大きな私人の家とおなじように、そこで暮らしのすべてが営まれていた。広間で客人は出迎えられ、酒類とおそらく食事が出され、そこに滞在し、ふつうはそこで眠ることもよくあった。しかしイングランドの農村の貴族の家では、十四、十五世紀のうちに、家族は広間から隣接や上階の個室に引きこもることがだんだん多くなり、その個室は同時に語り合いや読書そして夜の睡眠のためにつかわれた。おなじようにその当時のかなり大きく良質の「宿屋」にも、大きな寝室が一部屋か、寝台がぎっしりつまっている小さな寝室が数部屋そなわっていた。その後十六世紀にはドイツとおなじように、おそらくフランスの宿屋をモデルにした改善がさらにつづいた。おそくとも十六世紀末以降、イングランドでも数多くのきわめて良質な「宿屋」には、広間が一部屋と社交室が数部屋そして動物や聖人の名前の記号がついた客室が九室以上はあった。… (p.359)

日本の宿屋は異人歓待ではなかった

田村正紀の『旅の根源史』⁽¹¹⁾は、ツーリズムの核にある「旅立ちの動因」「人間の欲望」の歴史を考察した興味深い書である。宿屋や宿泊所についての記述はごくわずかであるが、ヨーロッパと比較対照してみると、意外と形態に類似しているところが多い：

- ① 「海道記」(*)の著者は未詳であるが、京都に住み中年にいたって出家した五〇歳過ぎの男である。文中の記述から見ると、承久の変で誅せられた上流階級に縁故があった。京都を發ち鎌倉に着いて、中心街の若宮大路近辺に宿を取る。多くの人の来訪に備えて、旅人のための宿泊機能が十分にできていたのであろう。かれは鎌倉に数人の知己・友人を持っていた。… ((*)：1224年に書かれた紀行文)
- ② 古代では旅館は旅籠はたごと呼ばれていた。旅籠とはもともと馬の飼料を入れる籠を意味したが、のちに旅行用の食料や日用品またその食料も意味するようになる。旅籠という言葉が意味するように旅館の起源は古代の駅伝制で、馬の世話をした駅家である。これらは公用旅行する官吏のためのものであった。一般の旅人は民家などに頼みこんで泊めてもらっていた。

中世になると、旅人の増加につれ宿泊施設が発達した。旅人を泊めていた民家などが、宿泊客の増加につれ次第に旅人への宿泊提供を主要な業務とするようになった。言語の意味内容はたえず現実を反映することから見ると、旅籠などの意味内容の変化はこの発達に対応したものであろう。街道筋の村のなかには、旅人への宿舎提供を主業務としている家が集積するところしゆくえきが生まれてきた。これらは宿駅と呼ばれるようになった。宿駅とは旅客を宿泊させ、また荷物の運搬に要する人馬などを継ぎ立てる設備のあるところである。中世文で「一の宿」というのは、この宿駅があり、旅人宿泊の便がある町村を意味した (宮本常一「日本の宿」⁽¹²⁾)。

- ③ 一六九一年、オランダ人エンゲルベルト・ケンペルは長崎出島から江戸まで旅行した。… /ケンペルが生ま

れ育った一七世紀の欧州の上流階級では「旅そのものが教育であり、自己啓発と修養の過程であるという新しい旅概念」(エリック・リード「旅の思想史」⁽⁴³⁾)がすでに確立していた。… /

街道沿いには多くの旅館もあった。とくに大名などが泊まる宿場町には本陣と呼ばれる立派な宿泊施設がある。いくつかの本陣では前屋と後屋に分れていた。一般の客は前屋に泊まった。薄暗くみすぼらしく汚れた畳が敷いてあり、普通の障子や襖で仕切られていた。また調理場もあり召使いや料理人もいた。しかし、後屋は高貴な客をもてなすため、清潔であり、畳、襖、衝立、すだれなどはすべて新ものに見えた。…

街道筋には、身分の低い徒歩の旅行者のために、数え切れないくらいの低級旅館あり、また疲れた旅人が上等ではないが暖かい軽い食事をとれる小料理屋、居酒屋、茶店があった。…⁽⁴¹⁾

(引用文の下線はママ：新しいもの；温かいの誤記であろう。)

幕末に来日したイザベラ・バードの場合は、異人歓待(ホスピタリティ)や‘おもてなし’より以前の、“好奇心”(好奇の眼に曝される)の対象であり、まさに悲惨であった：

とくに地方の典型的な宿屋に泊まったりすると、さらに一層イザベラの確信[とても「文明化」した日本にいるとは思えなかった：種田補遺]を裏付けるようなものはなかった。部屋には隙間風が入り込み、煙たく、ノミが飛びはね蚊がぶんぶんうなっている。下水汚物から酸っぱい臭気が立ちのぼり、垂木は湿っぽい煤で包まれ、壁の代わりに破れた障子が倒れかかっていた。障子はイザベラの最大の苦手とするものであった。というのは、ひとたび彼女が来るといふ噂が流れると、人々が彼女を見るために隣接した部屋に集まり、障子に無数の穴を開けてそこに目をひたと据えて、外国人の女というものとはどんなものかを見ようとするからである。夜休もうとしたときに、この押し黙った暗い熱心な眼差しで見つめられているのを意識すると、いらいらし当惑させられるものだった⁽⁴⁴⁾。

宿屋の起源と結論 (本書第四章結論 pp.389-399)

「結論」にいたる論理の流れは、目次と小見出しをみることにより明確となる。目次を再掲し、小見出し(項)を示し引用することで本研究ノートの「まとめ」としたい：

第四章 結論

第一節 方法上の考察

理念型としての異人歓待

社会の総体的な事実としての異人歓待

異人歓待の歴史叙述の問題点

第二節 異人歓待の形とその変遷

客人厚遇(ヨーロッパの周辺地域)

客人厚遇(西・南・中部ヨーロッパ)

客人厚遇と食糧抜き異人歓待

宿主と客人のむすびつきの解体

巡礼者・商人の異人歓待

居酒屋

教会の異人歓待

君主歓待

第三節 宿屋への移行

営業宿屋の登場

営業宿屋の登場の背景

近代の北アメリカの事例

近代の北アメリカと中世のヨーロッパの対応

最後の二項(小見出し)に本書の要点が凝縮して論述されているので以下に全文を示す：

近代の北アメリカの事例（ゴチは本文ママ）

中世とまったく似たような事情が、十七世紀から十九世紀までの北アメリカでもみられた。イングランドからの植民者には「宿屋 Inn」というのは故郷からよく知られていたものの、南部のプランテーション植民地ではじっさいに広くゆきわたらなかつた。旅人は食料品と寝具を持参することが多く、プランターによって無償で迎え入れられた。じっさいヴァージニアでは、この普遍的な異人歓待が個人の家ではどこでもみられ、州〔の法律〕で定められていた。この無償の異人歓待は旅人をくり返しおどろかせ、かなり太っ腹になされることが多く、ミシシッピー河の西からカリフォルニアにいたるまで、一八五〇年代やそれをすぎてまで維持された。ところが北部の植民地では、はじめからイングランドの原型にならなかつた「宿屋」がつくられ、ここにしか異邦人は泊まってはならなかつた。それが市場のような性質をそなえていたこともあって、「宿屋」のなかには取引所や商業会議所になってしまったりするものもあつた。ときには自分で鑄造貨幣とか紙幣を発行する宿屋の亭主もいた。そのために現物経済の特色がまだ色濃くのこっていた社会にあつては、宿屋を訪問することや宿屋そのものが「屋内の市場」となってしまうのはむりもないことであつた。一八五〇年代以降、西部開拓とくにゴールドラッシュが勢いを増していくなかで、重要な開拓ルート沿いに急速にかなり粗末な宿屋が大量にあらわれた。これらは同時に農家と宿屋、居酒屋と百貨店、宿駅と投票所などであり、きわめて金銭欲の強いというよりはじっさいに盗賊であつた亭主によって経営されていることが多かつた。もちろん西部の大都市で宿屋のあとに急速につづいたのは、さまざまの設備をじゅうぶにととのえた立派なホテルであつた。

近代のアメリカと中世のヨーロッパの対応

この近代のアメリカの似かよつた事例は、中世における異人歓待の発展段階を再構成するという本書のなかで示された試みを裏づけるものである。しかもある経済上、社会上、支配上の事情のもとでは、ときにはある段階が、またときにはある段階がふたたび入りこんできたり、そのほかの段階と同時にならんで存在したりするばかりか、中世の順序がことごとくおなじようにくり返されることさえあるという推測も、この事例によって裏づけられる。（本書 p.398-399）

ほぼ20年前に邦訳された本書は、交換の起源と異人歓待の関係をあきらかにし、敵を客人として厚遇することで魔力を減殺することにより財・情報・サービスの交換が成立すること、そして旅籠・宿屋は、視点を変えてみれば「取引・交換の市場」であつたことを実証し、居酒屋の役割（本稿では触れていない）に新見地を提示した研究書として、いまなお金字塔であり続けている。

“ホスピタリティ”は営業宿屋へと展開してホテルに続き今日に至つた。日本語に言う“おもてなし”の一語では代替・翻訳にはならない歴史を持っていることばなのである。

注記・備考

- (1) 副題は1982年1月ドイツで開催されたコロキウムでの報告・質疑応答をパイヤー教授自身が編集出版した「書物の題名からとつた。」（本書 p.406）それは H. C. Peyer (Hrsg.), Gsatfreundschaft, Taverne und Gasthaus im Mittelalter (Schriften des Historischen Kollegs, Kolloquien 3), München/Wien 1983である。岩井隆夫は筆者（種田）の良友・同門下生（慶應義塾大学院寺尾誠研究室・演習（ゼミ）所属）で、1982～84年にスイス政府奨学生としてパイヤー教授の薫陶を受けている。
- (2) Peyer, Hans Conrad (Peter Scheck): <http://www.hls-dhs-dss.ch/textes/d/D27094.php> (2014.11.05. 検索)：この記述をもとに仮訳・補筆した（種田）。パイヤーの主要著作（9冊）は岩井が紹介している（本書 p.401-402）が、心性史がフランス・アナール派の影響か否か、その他の言及はない。
- (3) <http://cgi.suwatprg.com/BACK/dnd/Collum/InnAndTarven.htm> (2015.01.06検索)「5000軒」は明かに間違っている。本書では「宿屋の件数（南フランスの場合）集落での宿屋の数はきわめて異なつてさまざまであり、おそらく確定することはほとんどできない。宿屋がまったく単独に存在した場合や小村では、その数は一軒である。これからはじまつて、かなり大きな村落では一軒から三軒、市場町や巡礼地や小都市では約一二軒であることが多かつた。（人口一万人までの）大都市では二〇軒、そして（人口二万人から一〇万人以上の）大都市にいたつては四〇、五〇、一〇〇軒あるいは数百軒にも達した」（p.365）とある。
- (4) http://www.rakuten.ne.jp/gold/westside/haikai/chuusei_1/ (2015.01.06検索) 本書には「…ほとんどの客室には天蓋付寝台がそなえつけられていたけれども、そのほかに移動するのが楽な脚輪付寝台 (carriolae) も備え付けられていた。寝台には掛け布団と敷布類と寝台用綴帳がついてた。部屋には腰掛け一、二脚、机一卓と長持一竿、壁には衣服を掛けるための鈎、また明かり用のろうそく棒、

床にはごぞのあることが多かった。…客人の半分以上はわずか一日だけしか滞在せず、二〇%が二日、二五%が三日、そしてわずか二%が一週間以上滞在したにすぎない。ほとんどの客人が馬でやって来たところか、場合によってはもっと多くの馬と召使を連れてやって来る客人もあり、せいぜい一〇%が徒歩でやって来たにすぎない。手工業者や騾馬の馱者はやって来なかった。いうまでもなくこれらの者たちは、台所が同時に食堂や休憩室としてつかわれているような、もっと粗末な宿屋に宿泊した。この区別は、南フランスの公文書に出てくる宿屋の三つのグループの区分に対応していた。第一のグループは騎乗の人びと用、第二のグループは騾馬の馱者用、第三のグループは徒歩の人びと用であった。このように宿屋を二、三のグループに分類することは中世後期の全ヨーロッパにみられた。ここからおもいおこされるのは、ベネディクト派修道会の会則いらい、修道院の客人はほとんどの場合に騎乗と徒歩というふたつのグループにすでに区別されていたということである。」(p.358)

- (5) 長谷部政弘編著『観光学辞典』(同文館、1997/11版2008参看)には項目「ホスピス」——中世ヨーロッパではホスピス、ホスピーツ(Hospitz)、ホステルリー(hostelry)など、国によって言葉は違うが、主に聖地巡礼をする巡礼団を宿泊させる宿泊施設として、巡礼路に沿う形で建てられ、教会の手で運営されていた。[塩田] / 北川宗忠編著『観光・旅行用語辞典』(ミネルヴァ書房、2008)ではコラム「ホスピタリティ」(p.216)——ホスピタリティはラテン語のホスベス(Hospes)が語源で…この言葉が何を意味しているのか、どのように受けとめる必要があるのか、現代社会に何を示唆しているのかを考察することは意義深いことである。ホスピタリティの意味については、次の3点である。第1は、客人は恐るべき敵であるという意味を有している。…第2は、迎える人と迎えられる人が時間と空間を超えて交互に入れ替わることを意味している。…第3は、迎える人と迎えられる人の両方の立場を含んでいることである。…すなわち、無償性にこそ、その特徴があるといえる。…(吉原敬典; 前者は、本書でいう「営業宿屋」の一面のみの言及であり、後者は本書での「有償の「異人歓待」」を欠いている。(…は中略したことを示す)
- (6) 日本ホテルスクール公式サイト「ホテル観光用語辞典」項目「ホテル」 <http://www.jhs.ac.jp/guide/glossary/3644.php> (2015.01.06. 検索) から。
- (7) フェルナン・ブローデル(浜名優美訳)『地中海 I 環境の役割』(藤原書店、1991) 第5章人間の単位—交通路と都市、都市と交通路 p.465. (引用は p.464)
- (8) 山代宏道「中世ヨーロッパにおける巡礼の旅—時空間移動の視点から—」(『広島大学大学院文学研究科論集』第63巻(2003)、p.33~50、引用は pp.36~37; 典拠は K. Sugden, *Walking the Pilgrim Ways*. Newton Abbot, Devon, 1991と注記してある(種田未看)。
- (9) 出典は川野祐二「サント・ガレン修道院—建築平面図における教育施設とその教育」(『エリザベト音楽大学研究紀要』11(1991年))。
- (10) 山田利一「観光と文学 文学作品からたどる観光の歴史」(『岐阜市立女子短期大学研究紀要』第61輯、平成24年、p.23~37、引用は pp.25-26)
- (11) 田村正紀『旅の根源史 映し出される人間欲望の変遷』千倉書房、2013; 引用は① p.58、② p.65-66、③ p.98~103 passim
- (12) 宮本常一編著『旅の民俗と歴史1 日本の宿』八坂書房、1987; ただし、この注記に該当する箇所は同書中に見当たらない。田村による同書の文意をふまえた要約引用であろう。(『日本の宿』に「宿駅」(ルビ付き)は見当たらず、「駅家(の制)」(同書 p.38 (p.39))となっているのがその一例である。)
- (13) エリック・リード(伊藤誓訳)『旅の思想史 ギルガメシュ叙事詩から世界観光旅行へ』法政大学出版局、1993; 次の指摘は“旅する異人”(ここでは武装した異人一軍事的遠征隊のこと)についてのものであるが、封建制を読み解く助けとなる— …「ゲズインデ」(Gesinde [農家の下男、下女、召使い、使用人])はもともと、「道連れ」を意味したが、首長の自由な、武装した従者を指すようになった。「ライゼ」(Reise)は現代ドイツ語では単に「旅」を意味するが、もともとは、周期的な戦闘に際しては君侯に付き従わなくてはならない従者の義務を意味した。旅の中で形成されたこの関係は、他の数多くの社会的絆を表わす言葉を提供した。たとえばノルウェーの法律では、女は「従者の絆で夫と結ばれた連れ」として婚姻の契りを結んだ。(同書 p.333)
- (14) パット・バー(小野崎晶裕訳)『イザベラ・バード 旅に生きた英国婦人』講談社(学術文庫)、2013; p.164-165

Fig. 3 中世ヨーロッパの宿屋は情報や娯楽のセンターでもあった



(出所:「旅籠でのトランプの勝負」 <http://www.wpsfoto.com/items/B4454> (2015.01.06検索))